

実は日本のさまざまな地域にも効果をもたらしている中小企業海外展開支援事業。そこには企業のみならず自治体や大学、地元のNGOなどさまざまなアクターも参加。オールジャパンでの取り組みが注目を集めている。

大学・NGOと手を携えて

“オール北海道”で事業化の可能性を探る

東洋農機 株式会社

北海道 ▶ インド 案 普



自走式馬鈴薯収穫機

ジャガイモの収穫量が世界2位のインド。しかし、各農家の生産規模は小規模で、牛や小型トラクターで掘り上げ、人手で拾い集めているため、非効率な生産方式が一般的だ。北海道の東洋農機は、そのインドから収穫機の引き合いがあり、海外進出の足掛かりとしてJICAの中小企業海外展開支援制

度を活用した。提案製品は同社の「自走式馬鈴薯収穫機」。この製品を導入することで収穫効率、品質を飛躍的に向上できる見込みで、提案は帯広畜産大学地域共同センターや北海道大学などとの連携で進められた。

2015年に行った案件化調査について、「インドには農協のような普及のための組織は存在せず、農民が手作業でジャガイモを拾い、人手不足も深刻。日本が機械化に変わり始めた半世紀近く前の経験を生かせることが多いとわかりました」と同社常務取締役の大橋敏伸さんは振り返る。一方で課題も見えてきた。ジャガイモは収穫だけでなく、春の栽培に始まり管理や貯蔵など1年サイクルで作業を考えていく必要がある。今後は、セミナーの開催などを通して同業他社に呼びかけ、“オール北海道”で事業化の可能性を探っていくとともに、現地での土壌条件に合わせたインド仕様の収穫の導入検証を行っており、将来的なインドでのビジネス展開を見据えた普及活動を行っている。

点字携帯端末機で海外の障害者を支援

ケージーエス 株式会社

埼玉県 ▶ フィリピン 案

障害者用点字機器の基幹部品となる「点字セル」で、世界70%のシェアを誇る“グローバル中小企業”ケージーエス(KGS)。同社のもの作りの理念は、「世の中になくてもならないものを作ろう」だ。20年ほど前に展示セルの生産拠点としてフィリピンのセブに海外子会社を設立。フィリピンは年率6~8%と比較的順調な経済成長を遂げているが、包摂的な

成長のためには雇用創出と継続的な貧困の削減が課題といわれている。全盲児・者の推定人口は10万人以上で、視覚障害者への教育・就労支援に重要な問題解決の手段といえる一方で、フィリピンを含むASEAN諸国では、点字による読み書きに対する社会的な認知と支援は極端に遅れているのが現状だ。

そのフィリピンで、2014年から点字携帯端末(ブレイルメモスマート)と点字独習機(ブレイルスタディ)を現地に持ち込み、全盲児・者の教育と就労を支援するための案件化調査を行っている。

本調査は、障害者や高齢者の生活を支援するNPO法人「支援技術開発機構」のメンバーを業務従事者に加え、支援技術の現地適応化検討に熱心に取り組んでいる。

同社では「案件化調査で点字携帯端末機の有効性を実証し、将来的にはフィリピンを起点に他のASEAN諸国へと水平展開していきたい」と展望を語っている。



点字携帯端末
(ブレイルメモスマート)